

半七捕物帳

お照の父

岡本綺堂



「いつか向島でお約束をしたことがありましたっけね」

「お約束……。なんでしたっけ」と、半七老人は笑いながら首をかしげていた。

「そら、向島で河童かっぱと蛇の捕物の話。あれをきょう是非うかがいたいんです」

「河童……。ああ、なるほど。あなたはどうも覚えがいい。あれはもう去年のことでしたらう。しかも去年の桜どき——とんだ保名やすなの物狂いですね。なにしろ、そう強情かうじやうにおぼえていられちゃあ、とてもかなわない。こうなれば、はい、はい、申し上げます、申し上げます。これじゃあどうも、あなたの方が十手を持っているようですね。ははははは。いや、冗談は置いて話しましょう。御承知の通り、両国の川開きは毎年五月の二十八日ときまっていたんですが、慶応の元年の五月には花火の催しがありませんでした。つまり世の中がそうぞうしくなっちゃいで、もうその頃から江戸も末になりましたよ」

老人は昔を偲しのび顔に話し出した。

「その二十八日の午過ぎひるごでした。いつもの年ならわたくしも子どもを連れて、両国界隈を見廻らなければならぬんですが、今年は川開きも見あわせになつたというので、まあ楽ができると思つて神田の家に寝ころんでいますと、一人の若い女が駈け込んで来たんです」

女は女房のお仙をつかまえて何か泣きながら話しているらしかったが、やがてお仙に連れられて半七の枕もとへいざり込んで来た。起き直つて見ると、それは柳橋のお照という芸妓の妹分で、お浪という今年十八の小綺麗な女であつた。

「やあ、浦島が昼寝をしているところへ、乙姫さんが舞い込んで来たね」と、半七は薄ら眠いような眼をこすりながら笑つた。「ことしは花火もお廃止だというじゃあねえか。どうも不景気だね。だんだんに世の中が悪くなるんだから仕方がねえ。それでもいつもの日と違うから、茶屋や船宿ふねやどはちつとは忙がしかろう」

云いながらよく視ると、柳橋の若い芸妓は島田を式のごとく美しく結びあげていたが、顔には白粉のあともなかつた。自体がすこし腫れ眼縁のまぶたを

いよいよ泣き腫らしていた。花火はなくなるともきようは川開きという書入れの物日に、彼女はふだん着の浴衣のまま家を飛び出して来たらしかつた。

「どうしたんだ。姉さんと何か喧嘩でもしたのか。この頃はもう何か出来たという評判だから、それで姉さんといがみ合つたんじやあねえか。そんな尻をおれの方へ持つて来たつて、辻番が違うぜ」と、半七はからかうように相手の顔をのぞくと、お浪は嬌然^{にこり}ともしなかつた。

「いいえ、お前さん。そんなどころじやないんですとさ」と、お仙も顔をしかめながら云つた。「姉さんが今、番屋に止められたと云つて、な、あちゃんがり泣き込んで来たんです。どうしたんでしようねえ」「ねえさんが番屋へあげられた」と、半七も団扇の手をやすめた。「なにかお客の引き合いじやあねえか」

「じやあ、親分さんはまだ御存じないんですか」と、

お浪は眼を拭きながら云つた。

「なんにも知らねえ。おめえの家に何かあつたのかえ」

「お父つさんがけさ殺されたんですよ」

お浪の話によると、けさの六ツ（午前六時）前にお照の家の戸を軽くたたたく者があつた。朝寝坊の芸妓家では、台所に近い三畳で女中のお滝がようよう蚊帳^{かや}をはずしているところであつた。戸をたたく音を聞きつけて、お滝はすぐに入口へ出て行くことすると、茶の間の六畳に寝ていたお照の父の新兵衛が蚊帳の中からあわてて呼び止めて、出てはいけない、明けてはいけなないと、小声で叱るように云つた。叱られてお滝も少しためらつていると、やがて表を叩く音は止んだ。と思うと、今度は裏口の方から跳り込んで来たものがあつた。お滝が起きると、すぐに水口の戸を一枚あけて置いたので、得体のわからない闖入者は薄暗がりの家の奥へまっしぐらに飛び込んで、新兵衛の蚊帳のなかへ鼠のようにくぐつて這入つた。年のわかにお滝は呆氣^{あつけ}に取られて眺めていると、かれは忽ち蚊帳から這い出して来

て、もとの水口から駈け出してしまった。まだ起きたばかりで半分寝ぼけているお滝には、何がどうしたのか判らなかつた。彼女はしばらく夢のように突つ立っていたが、なんだか少し不安にも思われるので、そつと茶の間へはいつて蚊帳の中をのぞいて見ると、新兵衛の寝衣には紅い血が一面に泌み出していた。

腰をぬかさなればかりにびっくりして、お滝は二階へかけ上がった。二階には娘のお照と妹芸妓のお浪とが一つ蚊帳のなかに寝ているので、彼女は忙がわしく二人の女をよび起した。二人もおどろいて降りてみると、新兵衛は刃物で喉笛を切られてもう死んでいた。三人は一度に声をあげて泣き出した。朝寝の町もこの騒ぎにおどろかさされて、近所の人達もだんだんに駈けあつまつて来た。町役人から式の通りに変死の届けを出して、与力同心も検視に出張した。

新兵衛は誰にどうして殺されたか、唯一の証人は女中のお滝であるが、彼女は十七の若い女で、寝惚けていたのと狼狽うろたえていたのとで、もちろん詳しい

ことはなんにも判らなかつた。彼女が番屋で申し立てたところによると、曲者は背の低い小児こどものような怪物で、顔もからだも一面に黒かつたのを見ると、おそらく裸体であつたらしい。起つて歩くかと思つと、這つてあるいた。その以上にはお滝はなんにも記憶に残っていないとのことであつた。併しこんな奇怪なあいまいな申し立てを、係りの役人は容易にほんとうとは受け取らなかつた。お滝はそのままだ番屋に止められてしまった。

お照もお浪も無論に調べられた。お浪は仔細ないと認められて一と先ず釈ゆるされたが、お照は申し口に少し胡乱うろんの廉かどがあるといふので、これも番屋に止められた。これだけのことが決まつたのは、その日もやがて午に近い頃で、月番の行事ぎぎうじや近所の人達がお照の家に寄り集まつていろいろに評定を凝こらしたが、差し当りはどうするといふ分別も付かなかつた。この上は然るべき親分の力を藉かけるよりほかはあるまいといふので、お照もお浪もかねて半七を識つてゐるのを幸いに、お浪は着のみ着のままで神田まで駈け付けたのであつた。

「そりやあちつとも知らなかった。十手に対しても申し訳がねえ」と、半七はすこし驚かされた。「なにしろ変なものが飛び込んだものだね。子供のようにな真つ黒なものかえ」

「お滝はそう云っているんです」と、お浪も臍に落ちないような顔をしていた。

「猿じゃありませんかね」と、お仙がそばから口を出した。

「やかましい。御用のことに口を出すな」

叱り付けて、半七はしばらく考えた。猿芝居の猿が火の見る半鐘を撞いて世間をさわがした実例は、彼の記憶にまだ新しく残っている。しかし猿が刃物を持って人を殺しに来るとは、作り話なら知らぬこと、実際には滅多にありそうにもないように思われた。

「それにしても、姉さんはなぜ止められたんだ。云い取り方が拙かったんだね」

「そうでしょう。止められると聞いたたら、姉さんは蒼い顔をして黙っていました」

「姉さんは一体どんなことを調べられた。おめえも

一緒に行ったんだから、知っているだろう」

この問いに対して、お浪は捗々しい返事をしなかった。彼女はお仙が出してくれた団扇を弄くりながら、黙って俯向いていた。

「おい、何もかも正直に云ってくれねえじゃあいいねえ。姉さんが助かるのも助からねえのも、おめえの口一つにあることだ、なんでもみんな隠さずに云って貰いてえ。姉さんはこの頃なにか親父と折り合いの悪いことでもあつたんじゃあねえか」

「ええ。この頃は時々喧嘩をすることがあるんです」と、お浪はよんどころなしに白状した。

「情夫の一件かえ」

「いいえ、そうじゃないんです」

「だって、姉さんには米沢町の古着屋の二番息子が付いているんだらう」

「それはそうですけれど、喧嘩の基はそれじゃないんです。家のお父さんが柳橋を引き払って、沼津とか駿府とか遠いところへ引越してしまおうというのを、姉さんが忌だと云って……」

「そりやあ忌だらう」と、半七はうなずいた。「な

「ぜ又、おめえのところの親父ちやんはそんなおかしなことを出しぬけに云い出したんだ。なにか訳があるだろう」

「それは判らないんですが、ただ無闇にこの土地にいるのは面白くないと云つて……。それで姉さんとたびたび喧嘩けんぱをしているんです。あたしも中へはいつて困つたこともありませんが、なぜ引つ越すんだか、その訳が判らないんですもの。良いとも悪いとも云いようがありません」

「おかしいな。すると、その矢先に親父が殺されたんで、姉さんが……。まさかに自分が手をくだしもしめえが、何かそれに係り合いがあるだろうと見込みを付けられたんだね。まあ、無理もねえところだ。おれにしても先ずそんなことを考える。そこで古着屋の二番息子はまだ呼ばれなかつたかえ」

「呼びに行つたんでしよう。ですけど、ゆうべから何処へか行つて、まだ帰らないんだそうです」

「あの息子は何とか云つたつけね」

「定さんというんです」

「違えねえ。定次郎というんだね。その定次郎は

ゆうべから帰らねえか」

半七は腕を拱こんだ。どういふ仔細があるか知らないが、おやじの新兵衛は土地を売つて他国へ行くという。娘のお照は江戸を離れるのが忌いやなものと、もう一つには情夫おとこと別れるのが辛いので、どうしても行かないと駄々をこねる。親子喧嘩がたびたび続く。その挙げ句に新兵衛が何者にか寝込みを襲われて殺された。こう煎じ詰めてくると男と女とが共謀か、それとも男ひとりの料簡か、どつちにしてもその下手人げしゅにんはかの定次郎らしく思われるのが、誰の眼にも映る暗い影であつた。それを正直に白状しないために、お照は番屋に止められたのであろう。半七もその以上には、差し当つて目串のさししようがなかつた。

唯ここに一つの疑問として残っているのは、なぜ彼の新兵衛が住み馴れた柳橋の土地を立ち退いて、沼津とか駿府とかの遠い国へ引つ込もうというのか。半七はその仔細を知りたかつた。

「おめえは一つ家にいるんだから、何もかも残らず知つてゐる筈だが、お前のところの親父は人から怨まれるような覚えがあるかえ」と、半七はまた訊いた。

むかしは知らないが、今は決してそんな事はないとお浪は確かに云い切つた。お父つきさんが正直で、情けぶかい人であることは近所の人達がみんな能く知つてゐる。月の四日にはきつと両国の橋番の小屋へ行つて、放し鰻うなぎをして帰るのを例としてゐる。神まいりにも行く。寺詣りにもゆく。それで博奕は打たず、酒は飲まず、こうした稼業には似合わないくらいかたぎの堅気な結構人である。もしも家のお父つきさんを怨む人があれば、それは外道げどうの逆恨みか、但しは物の間違いでなければならぬ。しかし今度の殺され方を見ると、どうしても物取りではない、意趣斬りであるらしい。それが自分にはわからないと彼女が云つた。

「それほど結構な人間なら、土地にいらねえよう。不義理をした訳もあるめえに、折角売れ出した娘

を無理に引き摺つて、なぜ草深いところへ引つ込む気になつたのか。どうしてもおめえ達には心当りがねえんだね」

「どうも判りません」と、お浪はやはり頭かぶりをさぶつた。「ですけれども、たつた一度こんな事があつたそうです。あたしが見た訳じゃありませんけれども、お滝の話には何でも先月の初め頃に、もう日の暮れかかる時分に一人の六部が家の前に立つて、なにか鐺かねを鳴らしていると、そこへ丁度お父つきさんが外から歸つて来て、その六部と顔見あわせて何だか大變にびつくりしたような風だつたそうで、それから二人が小さい声でしばらく立ち話をして、お父つきさんはその六部に幾らかやつたらしいということでした。その後にも日が暮れると、その六部がときどきたずねて来て、一度は草鞋をぬいで茶の間へ上がつて来たこともあるようですが、あたし達はいつも其の時はお座敷へ出ていたのでよく知りません。なんでもその六部が来るようになってから、お父つきさんは田舎へ行くと云い出したらしいんですが……」

「ふむ。そんなことがあつたのか」

半七の眼は動いた。結構人と評判の高い老人と、なんだか怪しげな六十六部と、この間にどういう糸が繋がっているかを、横から縦からいろいろに想像していたが、やがて彼はお浪に訊いた。

「おめえのところの親父は刺青ちやんほりものをしていたっけね」

「ええ。両方の腕に少しばかり」

「なにが彫つてある」

「若い時の道楽で、こんなものは見得みえにも自慢にもならないと、なるたけ隠すようにしていましたから、あたし達は能く見たこともないんですが、なんでも左の方は紅葉、右の方には桜が彫つてあつたようです」

「背中にはなんにもねえか」

「背中は真つ白でした」

「ちゃんは幾つだっけね」

「たしか五十九だと思つています」

「姉さんは貰い児の筈だが、親父は江戸者じやあるめえね」

「なんでも信州の方だとかいうことですが、姉さんもよく知らないようです。善光寺様の話を時々にし

ますから、信州の方にやあ相違ないと思えますけれど……」

訊くだけのことは大抵訊き尽したので、半七はお浪を帰した。いづれ後から行くから、それまでおとなしく待つていろと云うと、お浪もくれぐれも頼んで帰つた。

「お仙。ちよいと出るから着物を出してくれ、なんだか蒸し暑いと思つたら、少しくもつて来たようだな」

支度をして門かどを出ると、半七は子分の幸次郎に逢つた。

「親分。柳橋の一件がお耳にはいつていますかえ」

「やつと今聞いたんだ。申し訳がねえ。なにしろ、いい所へ面つらを持つて来てくれた。これから柳橋のお照の家まで行つてくれ」

「ようがす」

二人はすぐに柳橋へゆくと、お照の家には近所の人達があつまつて、何かごたごた騒いでいた。待ち兼ねたように出て来たお浪を蔭へ呼んで、半七はその後なんにも変つたことはないかと訊くと、別に

変つたこともないが、もう少し前に古着屋の息子が来て、お照が番屋へ止められた話を聞いて、真つ蒼になつて歸つたとお浪は話した。

「どうもその古着屋のせがれが面白くないじやありませんか。かまわずに引き挙げてしまいましようか」と、幸次郎はささやいた。

「まあ、待て。おれも一旦はそう思つたが、まあ、それは二の次だ。もう少しほかに穿索きくつて見る所がありそうだから、あんまりどたばたして方々へ塵埃ほこりを立てねえ方がいい」

半七は内へはいつた。女中のお滝はどうしたと訊くと、けさから番屋へ止められたままで、まだ下げられないとの事であつた。お照も無論歸つて来なかつた。新兵衛の死体はもう検視が済んで、茶の間の六畳に横たえてあつた。お照の下げられるのが遅いようならば、この時節柄いつまでも仏を打ちやつては置かれないので、近くの者が寄りあつまつて何とか葬式とむいを済ませなければなるまいと云つていた。半七も一応死人の傷口をあらためると、それは剃刀のような刃物で喉をえぐつたらしかつた。

それから水口みづぐちの方へまわつて、怪しい物のはいつて来たという路すじを調べてみると、台所の柱に黒い手の痕のようなものが小さく薄く残つて見つけた。半七は懐ろ紙をとりだして綺麗に拭き取つて、そばに立つている幸次郎にその紙をそつと見せた。

「こりやあなんだ」

「鍋墨のようですな」

「向う両国に河童かっぱは何軒ある」

「河童は……」と、幸次郎は考えた。「たしかに一軒だと思つています」

「それじゃ訳はねえ」と、半七はほほえんだ。「お前はこれからその小屋へ行つて、河童を引き挙げて来い。だが、まだ少し時刻が早い。商売の邪魔をするのも可哀そうだから、もうちつと待つていて日が暮れるだろう。小屋の閉場はなるのを待つていて、すぐに河童をあげるようにしろ」

幸次郎は心得て出て行つた。半七は茶の間へ戻つて、お浪にことわつて仏壇から過去帳を出して繰つてみると、月の四日のところに釈寂幽信士と戒名が

見えた。新兵衛が両国の川へ毎月放し鰻をするといふのは四日である。この四日の仏が新兵衛になにか特別の關係をもっていなければならぬと考えたので、半七はお浪に向つて、この仏はこの家の何者だと詮議したが、お浪はそれを知らないと言つた。しかし、この家を取つては余ほど大切の仏であるらしく、その日には新兵衛が手ずから仏壇に燈明を供えて、なにか念仏を唱えていたとのことであつた。

「ちゃんはこの頃どつかへ行つたことがあるかえ」「いいえ。もとから出嫌いの人でしたが、この頃はちつとも外へ出ないで、内にばかり坐つていました。そうして、なんだか人に逢うのを忌がつているようでした」と、お浪は云つた。

自分の鑑定がだんだんに中つてくると半七は思つた。彼はもう一度新兵衛の死骸をあらためると、その左の二の腕には紅葉を一面に彫つてあつて、その蒼黒い葉のかげに入墨の痕がかくされているのが確かに判つた。新兵衛はその過去の犯罪の暗い履歴をもつていて、その腕の刺青は入墨を隠すためである

こともすぐに覺られた。彼はその罪を悔いて情けぶかい結構人になつた。その罪をほろぼすために毎月の放し鰻をした。かれの犯罪は月の四日の仏に關係をもつてゐるらしいと半七は思つた。しかし、どうしてその仏を見付け出していいか。半七はさすがに見当が付かなかつた。

そのうちに浅草の七ツ（午後四時）がきこえたので、半七はともかくもここを出て、向う両国へまわつて幸次郎の模様を見て来ようと、居あわせた人達に挨拶して門を出ると、陰つた空のうえから紫の光がさつとほとばしつて来た。おや、光つたなと思う間もなく、大粒の雨がどつと降り出したので、半七は舌打ちをしながら再び内へ引つ返した。

「とうとう降つて来た」

「夕立ですからすぐに止みましよう」と、お浪は入口の戸を一枚閉めながら云つた。

よんどころなしに半七は茶の間へ戻つて又坐ると、稲妻がまた光つて、雷の音がだんだん近くなつて来た。ぶちまけるような夕立が飛沫を吹いて降り込んで来るので、みんなも手伝つて方々の戸を閉め

た。狭い家のなかには線香の煙りがうず巻いてみながぎつて、息がたまるほどに蒸し暑いのを我慢して、半七も扇を使いながら其処に暗れ間を待つていると、雨はやがて小降りになったので、お浪が傘を貸そうというのを断わつて出た。半七は手拭をかぶつて、尻を端折はしよつて、ぬかるみを飛び飛びに渡りながら両国橋を越えた。

川向うの観世物小屋はもう大抵しまつていた。今の夕立が往來の人を追つ払つてしまつたらしく、ぐしよ、濡れになつた菰もも張りの小屋の前には一人も立つてゐる者はなかつた。半七は向う側の心太屋こころてんやの婆さんに訊いて、そこだと教えられた河童の観世物小屋のまえに立つて見あげると、白藤源太らしい相撲取りが柳の繁つてゐる堤を通るところへ、川の中から河童が飛び出して、その行く先を塞ぐように両手をひろげている絵看板が懸かけてあつた。

その頃の向う両国にはお化けや因果物のいろいろの奇怪な観世物が小屋をならべていた。河太郎もその一つで、葛西かさいの源兵衛堀で生け捕つたとか、筑後の柳川から連れて来たとか、子供だましのよう

な口上を列べ立ててゐるが、その種はもう大抵の人にも判つていた。十三四歳の男の兒を河童頭に剃らせて、顔や手足を鍋墨で真つ黒に塗つて、大きな口から紅い舌をべろりと出して、がらがらがあと不思議な鳴き声を聞かせる。ただそれだけの他愛もない芸であるが、それでも河童とか河太郎とかいう評判に釣り込まれて、八文の木戸銭を払う観客が少なくない。半七はお照の台所の柱に残つていた鍋墨の形状から、新兵衛殺しの下手人はこの河童小僧と鑑定したのであつた。表はもう閉まつてゐるので、裏木戸の方へ廻つてゆくと、楽屋の者もみんな帰つてしまつて、楽屋番の爺さんが一人で後片付けをしてゐるところであつた。

「おい、六助さん。お前はこの頃ここへ來てゐるのか」

「おや、親分さんですか。どうも御無沙汰をいたしました」と、楽屋番の六助はあわてて挨拶しました。

「お化けの方はなぜ止したんだ」

「へえ、どうもあの楽屋は風儀が悪うござんして、御法度の慰み事が流行はるもんですから……」

「爺さんもあんまり嫌いな方じやあるめえ。時に、家の幸次郎は見えなかつたかね」

「幸さんはお見えになりました。いや、それで樂屋の者も心配して居りますよ」

「河童を連れて行ったのか」

「へえ、すぐに帰すと仰しゃいましたけれど……」

河童がなかなか素直に行きませんのを、無理にだまして連れておいでになりました」

「河童は幾つで、なんといいんだえ」

「本名は長吉と申しまして、十五でございます」

「どこから拾つて来たんだ。親はねえのか」

「なんでもこの一座が四、五年前に信州の善光寺へ乗り込んだ時に連れて来ましたので、お察しの通り両親はございませぬ。おふくろに死なれて路頭に迷つてゐるのを、まあ拾ひあげて来ましたようなわけで……。いえ、わたくしは能くは存じませぬが、なんでもそんな話でございます」

「親父もないんだね」

「へえ、親父は長吉が生まれると間もなく死にましたそうで」

「変死かえ」と、半七はすぐに訊いた。

「よく御存じで……。高い声では申されませんが、なんでも悪いことをしてお仕置になりましたそうで……」

「ふむう、そうか。そこで此の頃、河童のところへ誰かたずねて来た者はねえか」

六助は少し考えていたが、やがて思い出したようになずいた。

「あります、あります。廻国の六部のような男が……」

三

半七の商売を知っている六助は、訊かれるに従つて総てのことをしゃべつた。六部は四十近い、痩せて背の高い、眼つきの少し恐ろしい男で、長吉の叔父だという話であつた。顔立ちの幾らか肖てゐるのを見ると、それは嘘ではないらしいと六助は云つた。その六部がきのう普通の浴衣を着て、樂屋へふらりとたずねて来て、鰻を食わしてやるからと云つて長吉をどこへか連れ出した。

「その六部は何処にいるのか知らねえか」
 「なんでも下谷の方にいるということですが、宿の名は存じません」

その以上のことは六助はまったく知らないらしいので、半七はこころで打ち切つて小屋を出た。それにしても幸次郎はどこへ河童を連れて行ったか。大方そこらの番屋へ引き挙げたのであろうと、半七はその足で近所の自身番へ行つてみると、そこには幸次郎の姿も見えなかつた。それでも念のために店へはいつて訊くと、自身番の親方は面目ないような顔をして答えた。

「実はそのことで幸次郎さんに大変怒られまして……。なんとも申し訳がございません」

「どうしたんですね」
 「河童に逃げられました」と、親方は額の汗を拭いた。そこに居あわせた番太郎も小さくなつて俯向いた。この自身番へあずけて行つた。自身番には店の側に

河童を取り逃がした事情はこうであつた。さつき幸次郎が観世物小屋から河童を引つ張つて来て、この自身番へあずけて行つた。自身番には店の側に

一種の留置場ともいうべき六畳ほどの板の間があつて、その太い柱に罪人を縄でつないで置くのが例であつた。河童もそこに繋がれていると、俄かに大夕立が降り出したので、番太郎はあわてて自分の家へ帰つた。自身番の者共もおどろいて其処らを片付けた。店先の履き物を取り込む者もあつた。裏口の戸を閉めにゆく者もあつた。そのどきくさまぎれに河童は縄をぬけて逃げ出した。勿論、その逃げてゆくうしろ姿を見つけた者はあつたが、人間の河童は陸でも身が軽いので、あれあれといううちに吾妻橋の方へ飛んで行つてしまつた。そこへ幸次郎が帰つて来た。

彼は柳橋へ半七を迎えに出たのであるが、途中で夕立にふり籠められて、そこらの軒下に雨宿りをして、小降りになるのを待つてお照の家へゆくと、どこで行き違つたか半七はもう出てしまつた後であつたので、また引つ返して自身番へくると、この始末である。幸次郎の怒るのも無理はなかつた。彼は腹立ちまぎれに居あわせた者どもを頭ごなしに叱り付けた。そうして、すぐ河童のあとを追つて行つた。

「そりやあ拙いことをやつたもんだ。おめえ達の不行き届きで、なんと云われても仕方がねえ」と、半七はその話を聴いて眉をよせた。

「親分さん、実に申し訳がございません」

あやまつても詫びても今更取り返しは付かない。ここでぐずぐず云っているよりも、幸次郎に加勢して河童のゆくえを早く探し出す方がましだと思つたので、半七は草履を自身番にぬいで置いて、跣足になつて駆け出した。どこという的もないが、吾妻橋の方角へ逃げたというのを手がかりに、彼は岸づたいに急いで行つた。

むやみに駆け出しても仕方がないので、彼は小さな小僧を見なかつたかと途中で訊きながら歩いた。すると、一軒の荒物屋へ此の夕立の最中に一人の真つ黒な小僧が飛び込んで来て、店先にかけてあつた菅笠を搔つさらつて逃げたということが判つた。その小僧は笠をかぶつて小梅の方角へ行つたというのを頼りに、半七は向島の方へまた急いだ。

雨はもう止んだが、葉桜の堤は暗かった。水戸の屋敷の門前で、幸次郎のぼんやりと引つ返して来る

のに出逢つた。

「どうした。いけねえか」

「自身番の疝氣野郎、飛んでもねえど、じを組みやがつて、お話にもならねえ」と、幸次郎は忌々しうに云つた。「なんでもこつちの方角へ来たらしいんですが、どうしても当りが付かねえには困りました。どうしましょう」

「仕方がねえ」と、半七も溜息をついた。「だが、餓鬼のこつた。まさかに草鞋を穿くようなこともあるめえ。いずれ何処からか這い出して来るだろう。なにしろ、腹が空つて来た。そこらで蕎麦でも手繰ろう」

二人は堤下へ降りて食い物屋をさがした。蜷の看板をかけた小料理屋を見つけ、奥の小座敷へ通されて夕飯を食っているうちに、萩を一ぱいに植え込んであるらしい庭先もすっかり暗くなつて、庭も座敷も藪蚊の声に占領されてしまった。

「日が暮れたのに蚊いぶしを持って来やあがらねえ。この村で商売をしていながら、気のきかねえべらぼうだ。これだから流行らねえ筈だ」

むしやくしや腹の幸次郎は無暗にぼんぼんと手を鳴らして、早く蚊いぶしをしろと呶鳴った。女中は蚊いぶしの道具を運んで来て、頻りにあやまつた。「相済みません。店でお化けの話を聴いていたもんですから、ついうっかりして居りました」

「へえ、お化けの話……。そりやあおめえの親類の話じゃあねえか」

「よせよ」と、半七は笑った。「ねえさん、堪忍してくんねえ。この野郎少し酔っているんだから。そこで、そのお化けがどうしたんだ。ここの家へ出るわけじゃあるめえ」

「あら、御冗談を……。たつた今、家の旦那が堤で見て来たんですって。嘘じゃない、ほんとうに出たんですって、河童のようなものが……」

「え、河童だ」と、幸次郎もまじめになった。

半七はその主人をちよいと呼んでくれと云った。呼ばれて出て来たのは四十五六の男で、鬨越しで縁側に手をついた。

「御用でございますか」

「いや、ほかじゃあねえが、おまえさんはたつた今、

堤で何か変なものを見たそうだね。なんですえ」

「なんでございましょうか。わたくしもぞつ、としました。相手がお武家ですから好うござんしたが、わたくし共のような臆病な者でしたら、すぐに眼を眩してしまつたかも知れません」

「河童だというが、そうですかえ」と、半七はまた訊いた。

「お武家は河童だろうと仰しやいました。まあ、こうでございます。わたくしが業平の方までまいりまして、その帰りに水戸様前からもう少しこつちへまいりますと、堤の上は薄暗くなつて居りました。わたくしの少し先を一人のお武家さんが歩いておいでございまして、その又すこし先に、十四五ぐらいかと思うような小僧が菅笠をかぶつて歩いて居りました」

「その小僧は着物をきていましたかえ」

「暗いのでよく判りませんでした。黒つぽいような単衣を着ていたようです。それが雨ががりの路悪の上に着物の裳を引き摺つて、跣足でびちよびちよ歩いてるので、あとから行くお武家さんが声をか

けて……お武家さんは少し酔っていらつしやるようでした……おい、おい、小僧。なぜそんなだらしない装なりをしているんだ。着物の裳をぐい、とまくつて、威勢よく歩くと、うしろから声をかけました。が、小僧には聞えなかつたのか、やはり黙つてびちよびちよ、歩いているので、お武家はちつと焦じれつたくなつたと見えまして、三足ばかりつかつかと寄つて、おい小僧、こうして歩くんだと云いながら、着物の裳をまくつてやりますと……。その小僧のお尻の両方に銀のような二つの眼玉がぴかりと……。わたくしはぎ、よつとして立ちすくみますと、お武家はすぐにその小僧の襟首を引つ掴とんで堤下とてしたへほうり出してしまいました。そうして、ははあ、河童だと笑いながらすたすたと行つておしまいなさいました。わたくしは急に怖くなつて、急いで家へ逃げて帰つてまいりました」

半七は幸次郎と眼をみあわせた。

「そうして、その化け物はどつちの堤下へ投げられたんですえ」

「川寄りの方でございます」

「なるほど不思議なことがあるもんですね」
勘定を払つて、二人は忽々にそこを出た。

四

「親分。そのお化けというのは河童ですね」と、幸次郎はささやいた。

「ちげえねえ。たしかに河童だ」

粗そ忽としい武士はほんとうの河童だと思つたかも知れないが、それは河童の長吉に相違ないと半七は思つた。両国の河童は真つ黒に塗つた尻の右と左に金紙や銀紙を丸く貼りつけて、大きい眼玉と見せかけ、その尻を無造作に観客の方へむけて、四つん這いに這いまわるのを一つの芸当としてゐる。酔つてゐる武士と、臆病な亭主とは、ゆう闇の薄暗がりでのその尻の眼玉におどろかさされたのであろうが、半七から観れば、その尻の光つたというのが却つてほんとうの化け物でない証拠であつた。

「なにしろ、早く堤下へ行つてみようぜ」

亭主の教えてくれたのは此処らであろうと見當

をつけて、二人は隅田川に沿うた堤下に降りると、岸と杭とのあいだに挟まつて何か黒いものが横たわつてゐるらしかつた。幸次郎はすぐに引き摺りあげて見ると、果たしてそれは河童の長吉であつた。かれは武士に手ひどく投げつけられたはずみに、樹の根か杭かで脾腹を打たれたのであろう、片足を水にひたして息が絶えていた。杭に挟まれたのがこつちに取りつて勿怪の幸いで、さもなければ下流の方へ遠く押し流されてしまつたかも知れなかつた。

「ほんとうに死んだのじゃあるめえ。そこらまで負つて行つてやれ」と、半七は云つた。

河童を負つて幸次郎は堤へあがつた。半七は先へ立つて元の料理屋へ引つ返すと、家じゅうの者はおどろいて騒いだ。怖いもの見たさで女中たちもそつと覗きに来た。

「おい、御亭主。気の毒だがこの河童の始末をして貰いてえ。泥だらけのこの姿じゃあ座敷へ入れることができねえ」

半七の指図で、店の者は手桶に水を汲んで来た。河童の正体は大抵わかつたので、亭主も急に強く

なつた。彼は家内のものと一緒になつて河童の顔や手足を洗つてやつた。尻の銀紙を発見したときに亭主も思わず嘖き出した。こうした手当てには馴れてゐるので、半七は河童を奥の小座敷へかつぎ込んで介抱すると、長吉はやがて息を吹き返した。半七は更に用意の薬を飲ませた。水を飲ませた。

「やい、河童。しつかりしろ。もう人間らしくなつたか。ここは料理屋の座敷だが、てめえを調べるのは御用聞きの半七という者だ。楽屋番を相手に微塵棒をしゃぶつてゐる時とは訳が違うから、そのつもりで返事をしろ。てめえは今朝、柳橋の芸妓屋へ這い込んで、親父を剃刀で殺したろう。覚えがねえとは云わせねえ。台所の柱にてめえの手のあとが確かに残つていた。さあ、ありていに申し立てろ。第一、てめえにうしろ暗いことがねえならば、なぜ番屋を逃げ出した。おまけに途中で笠を盗んで逃げやがつたらう。さあ、証拠はみんな揃つてゐるんだ。これでも恐れ入らねえか」

相手は子供である。半七に鋭く睨みつけられて、河童はもろく恐れ入つた。彼は叔父の長平にそその

かされて、お照の父の新兵衛を殺したに相違ないと素直に白状した。

「それにしても、なぜその新兵衛を殺す気になったんだ。てめえの叔父さんは新兵衛に遺恨があるのか」

「新兵衛という奴はおいらのお父っさんの仇なんだ。おいらあ其の仇討を立派にしたんだ」と、河童は鍋墨のまだ消え切らない顔に大きい眼をひらかせ、俄かに肩をそびやかした。

「仇討……。ほんとうか」と、半七は少し案外に思った。しかしだんだんその話を聴いてみると、これも一種の復讐には相違なかつた。

長吉の父は長左衛門といつて、信州善光寺の在ざいに住んでいた。お照の父の新兵衛はむかしは新吉といつて、やはり同じ村に生まれた者であつた。長左衛門も新兵衛も土地では札付きの悪党であつたらしい。今から十三年前に二人は共謀して隣り村の或る大だいじん尽の家へ押し込みにはいつて、主人夫婦と娘とをむごたらしく斬り殺した。その詮議があまり嚴重になつたので、新兵衛は土地の御用聞きのところへ駆

け込んで、その罪人は長左衛門であると密告した。かれも共犯者であるらしいことは御用聞きも薄々察したのであるが、密告の功によつて彼は自由に土地を立ち退くことが黙許された。彼はすぐに何処へか逃げてしまつた。長左衛門は召捕られて磔はりつけ刑になつた。

新兵衛は友を売つて自分の身を全うしたのである。その事情が長左衛門の遺族の耳にも洩れたが、御用聞きも黙許で彼を逃がしたのであるから、今更どうすることも出来なかつた。長左衛門の女房は非常ひじょうにそれを口惜しがつて、死ぬきわまでも不実の友を呪つていた。長左衛門には長平という弟があつて、これも兄とおなじ血をわけた悪党で、兄が仕置になつた当時は隣国りんこくの越後の方にさまよつていたが、これを聞き伝えて故郷へ歸つて来た。新兵衛の裏切りを聞いて彼もひどく憤つたが、自分もうしろ暗い身のうえで、表向きには立派な口を利けないので、恨みを呑んで再びどこへか立ち去つてしまつた。

それから十年ほど経つて、長平は久し振りで故郷

へ又帰ってくる、嫂はもう死んでいた。甥の長吉は両国の河童に売られたという噂も聞いた。かさねがさねの一家の悲運を見て、長平もさすがに心さびしくなった。ここらでもう料簡を入れ替えて、兄や自分の罪ほろぼしに六十六部となつて廻国修行の旅に出ようと思ひ立つた。彼は仏の像を入れた重い笈を背負つて、錫杖をついて、信州の雪を踏みわけて中仙道へ出た。それから諸国をめぐりあるいて江戸へはいつて来たのは、ことしの花ももう散りかかる三月のなかばであつた。彼は下谷辺のある安宿を飯の宿として、江戸市中を毎日遍歴した。

彼がふた月あまり江戸に足をとどめている間に、殆ど同時に敵と味方とにめぐりあつたのであつた。かたきは彼のお照の父で、新吉の名を今は新兵衛と呼びかえて、柳橋に芸妓屋を開いていることが判つた。甥の長吉はやはり河童になつて、両国の観世物小屋に晒されていることが判つた。長平は甥にも逢つた。偶然の機会から新兵衛にも出逢つた。

新兵衛はもう生まれ変つたような善人になつていたので、むかしの友達の弟に逢つてしきりに過去

の罪を謝した。自分たちが手にかけて大尽一家の菩提を弔うばかりでなく、長左衛門が仕置に逢つたのは二月四日で、その命日に毎月かならず放し鰻の供養を怠らないと云つた。彼はある寺から長左衛門の戒名を貰つて来て、仏壇に祀つてあることも話した。長平もむかしとは人間が違つていたので、悔い改めているこの善人を執念ぶかく責めることも出来なくなつた。かれは新兵衛の罪をゆるすと云つた。新兵衛はよろこんで、御報捨のしるしだと云つて彼に二十両の金を贈つた。

その金が二人の禍いであつた。久し振りで二十両の大金を受け取つた六十六部は、その晩すぐに服装をこしらえて吉原へ遊びに行った。それが口火になつて彼の殊勝らしい性根はだんだんに溶けてしまつた。六十六部は再び昔の長平に立ちかえつて、新兵衛のところへ度々無心に行つた。しまいには金の無心ばかりでなく、彼は新兵衛の貰ひ娘のお照の美しいのを見て、飛んでもない無心までも云い出すようになった。相手の飽くことのない誅求には、新兵衛もさすがにもう堪えられなくなつて、終には

手きびしくそれを拒絶すると、長平はいよいよ羊の皮裘かわころもをぬいで狼の本性をあらわした。彼は甥の河童をそそのかして親のかたきを討たせたのであった。

「これは河童の長吉の白状と、長平の白状とをつきまぜたお話で、長吉は叔父の手さきに使われて、ただ一途に親父のかたき討の料簡でやった仕事なんです」と、半七老人は説明した。「つまり新兵衛の方はすつかり善人になり切っていたんですが、長平の魂はまだほんとうの善人になり切らないもんですから、すぐにあと戻りをして、とうとうこんな事件を出来しゅつたさせてしまったんですよ」

「長平は勿論つかまつたんですね」と、わたしは訊いた。

「河童の白状で大抵見当が付きましたから、それからお照の家の近所に每晚張り込んでいますと、新兵衛しよなかの初七日が済んだ明るる晩に、案じようの定その長平が短刀を呑んで押し込んで来て、どうする積りかお狼を嚇おそかしているところを、すぐに踏み込んで召捕りしました。長平は無論に死罪でしたが、長吉の方はま

だ子供でもあり、どこまでも親のかたきを討つつもりでやった仕事ですから、上かみにも御憐愍ごれんびんの沙汰があつて、遠島えんとうというところで落着おちやくしました。これが作り話だと、娘や芸妓や其の情夫の定次郎の方にもいろいろの疑いがかかつて、面白い探偵小説が出来上がるんでしようが、実録ではそう巧く行きませんよ。ははははは。ただちとばかりわたくしの味噌をあげれば、はじめから芸妓や情夫の色つぽい方には眼もくれないで、なんでも善人の親父の方に因縁があるらしいと、その方ばかり睨み詰めていたことですよ。腕に入墨がはいっているくらいですから、新兵衛はその前にも悪いことをたくさんやっていたんでしようが、折角善人に生まれ変わったものを可哀そうなことをしました。河童をほうり出した武士ですか、それはどこの人だか判りません。その人は向島で河童を退治したなどと一生の手柄話にしていたかも知れませんが。まったくその頃の向島は今とはまるで違っていて、いつかもお話し申した通り、狸も出れば狐も出る、河獺かわぞも出る、河童だつて出そうな所でしたからね」

「蛇も出たんでしよう」

「蛇……。いや、謎をかけないでもいい。ついでにみんな話しますよ。しかしこの蛇の方の話は少しあいまいなどころがあるんですね。まあ、そのつもりで聴いてください。場所は向島の寮で、当世の詞ことばでいえば、その秘密の扉とびらをわたくしが開いたというわけです」

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和 61）年 3 月 20 日初版 1 刷発行

入力：tatsuki

校正：山本奈津恵

1999 年 8 月 17 日公開

2004 年 2 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。